第三者意見

CSR報告書は、CSRへの取り組み状況の報告だけでなく、企業理念の実現のための取り組みに対するコミットメントの発信ともいえます。本年も、そのような視点から意見を述べたいと思います。

株式会社インテグレックス
代表取締役社長
秋山　をね氏

1 評価したい点

「市民に愛され市民に貢献する」というグループの企業理念の実現に向けて、事業活動のすべてで全員参加で取り組みを進めるという変わらない姿勢は高く評価できます。

冒頭の、今年で3回目となる世界各地のグループ従業員による「あなたにとってCSRとは?」のボードの掲示をはじめ、「社会とシチズン」や「環境とシチズン」で報告されているさまざまな取り組み事例に従業員の顔が見え、「全員参加型CSR」が実践されていることが感じられます。

CSR活動の目標と取り組み状況については、昨年の活動のなかで今後の課題として把握された4点を今年の優先課題とし、各社ごとにCSR活動目標を設定して取り組みが展開され、実績と評価、今後の取り組み・課題が報告されており、PDCAを廻しながら着実に活動が進められていることがわかります。

今年は、「特集」としてグローバルでのCSR活動を取り上げていますが、各国で、それぞれのニーズに応じた社会貢献活動を行っているとともに、「活動により、グローバルな課題に目を向け個人として社会に貢献できることを考える機会となった」とのコメントが印象的でした。

具体的な取り組みについては、お客様の声を活かしたものづくりや、対話を通じたお取引先との関係構築、働きやすい職場づくりのための各種制度の見直し等、ステークホルダーの声を聞きながら取り組みを進め、改善を図っていることがうかがえます。

環境への取り組みについては、昨年改訂されたグループ環境方針に沿った目標が設定され、2010年度実績と評価が報告されており、「小さいは、エコになる。」のスローガンのもと、着実に取り組みを進めていることがわかります。グループ会社での環境家計簿制度の導入等、「従業員一人ひとりの感性が行動を起こす上での基本」という従業員参加の取り組みにシチズンらしさを感じました。

2 今後に期待したい点

海外での取り組みについて、今年は、「特集」で取り上げられていますが、各国の社会貢献活動の報告に加え、活動推進の基盤となるグループ企業理念共有のための取り組みの報告や、企業行動憲章第8条の「海外現地への貢献」事例、従業員の6割以上を占める海外従業員の「顔」と「声」が今後さらに増えることを期待します。

また、グループ各社のリスク評価によって優先度の高いリスクとして上げられた自然災害BCPへの取り組みについて報告されていますが、東日本大震災による一部生産・販売拠点での被災からの回復において、それらの取り組みがどのように活かされたか、どういった課題があったかを、今後検証していくことが求められます。

3 未来に向けて

3・11東日本大震災を契機として、企業と社会の関わりや社会的存在としての企業のあり方が以前にもまして重要となりました。企業と人、企業と地域、企業と企業、すべてのものがお互いに働き合い、力を合わせることが重要といえ、まさに「すべてのものは互いに働き合っており、一体となったときにはじめて結果が出る」という二宮尊徳の「一圓融合」が求められていると思います。

「市民に愛され市民に貢献する」企業として、本当に持続可能な社会を築いていくために何が必要か、何ができるのか、一人ひとりが考え、力を合わせて、今後も、「企業と人」、「企業と社会」が一体となった取り組みを続けられることを期待します。